

案内絵ハガキから見た貴重書展示会のイメージ（2）

「日本の国際化を進めた50冊」

所村 悠平



検索コーナーの隣に本学図書館が主催して開いた展示会の案内絵ハガキが並んでいます。今回、私が皆さんにご紹介するのは「日本の国際化を進めた50冊」という展示会です。本学図書館には50万冊以上もの資料が所蔵されていますが、私がこの展示会に注目したのは、日本と世界の接点となった貴重な資料に触れてみたいと思ったからです。

この展示会は1997（平成9）年に本学創立50周年の記念として、また私立大学図書館協会総会・研究大会が本学で開かれた記念として、この年に二度にわたって行われました。今から12年も前の展示会です。ちなみに、私の10歳の時のことです。出展された貴重書の年代は、和書では江戸時代初期から明治時代のもの、洋書では1500年代のものもあります。

中でも私の印象に残った和書は、杉田玄白らによる『解体新書』（安永3-1774年）です。この『解体新書』は杉田玄白や前野良沢らが、オランダ語医訳書『ターヘル・アナトミア』の翻訳を3年半にわたる辛苦の末に完成させたものです。本書は当時の日本の医学界に多大な貢献をただけでなく、広く蘭学の勃興を促すことにもなりました。今年の6月から9月までのオープンキャンパスで行われた展示会、「高校生が知っている世界の有名な書物展」でも登場していましたが、必ずと言っていい程、高校生や観に来ていた方が足を止めて「おお」と声を上げていました。私も「本物や！」と魅入って

しまったひとりです。

洋書では『幕末日本図絵』（1870年）に興味を持ちました。スイス時計協会会長のエム・アンベールが日本市場開拓を目的とした修好通商条約の締結のために来日した際に、日本の風俗や習慣などを観察してノートに書き綴り、帰国後まとめあげて雑誌に掲載しました。本書はそれを2巻本として刊行されたものですが、特に本書の約450枚に及ぶ挿絵が印象に残りました。どう見ても日本の光景なのですが、外国人が描いた日本はどこか独特な雰囲気を放っています。外国人の目から見た日本はこんな風に映っていたのでしょうか。



展示目録と同じ体裁の案内はがき

「図書館稀観書展案内葉書コレクション」には1992年から2008年の展示会案内絵ハガキが置かれています。皆さんも、是非ともこのコーナーに興味を持って、実際に足を運んでください。きっと新しい発見があります。

しよむら ゆうへい（英米語学科4年次生）